



監督・脚本：バーバラ・ロー
デン
出演：バーバラ・ローデン/
マイケル・ヒギンズ/
ドロシー・シュベネス
/ピーター・シュベネ
ス/ジェローム・ティ
アー

WANDA ワンダ

1970年/アメリカ映画
配給：クレプスキュールフィルム/103分

2022 (令和4) 年8月6日鑑賞

テアトル梅田

👁️👁️ みどころ

巨匠エリア・カザンは、名作映画『エデンの東』（55年）で有名だが、そんな夫からの“独立宣言”とも言うべき本作を残し、癌により48歳の生涯を終えた妻がバーバラ・ローデン。本作は、そんな彼女が監督、脚本、主演した、たった1本の映画だ。

1970年前後の米国は、『俺たちに明日はない』（67年）や『明日に向かって撃て！』（69年）等の名作が多く、アメリカン・ニューシネマが大爆発！そんな中で見向きもされなかった本作が、なぜかその後大絶賛され、日本でも今般初公開！

『キネマ旬報』の記事でも新聞紙評でも、評論家諸氏は大絶賛だが、残念ながら私はイマイチ・・・。



◆本作で主演し、かつ監督・脚本したバーバラ・ローデンは、映画『エデンの東』（55年）等で有名な巨匠エリア・カザンの妻。彼女は夫からの“独立宣言”とも言うべき本作を残し、癌により48歳の生涯を終えたようだ。1970年にたった1本だけ作られた本作は、アメリカではほぼ黙殺されていたが、その後世界の映画人から絶賛され、日本でも約50年ぶりに初公開。

『キネマ旬報』7月下旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」では、3人の評論家が星5つ、5つ、4つと絶賛している。新聞紙評でも絶賛しているから、こりゃ必見！

◆1970年前後は、日米共に素晴らしい映画が多かった。“アメリカン・ニューシネマ”として有名になった『俺たちに明日はない』（67年）や『明日に向かって撃て！』（69年）等の名作は、ベトナム戦争反対をはじめとする学生運動、大衆運動が盛り上がる中で生まれたが、本作もそれと同じような“脱走型ロードムービー”・・・？

そう言えなくもないが、「ウーマンリブ」が声高に叫ばれ始めた時期ながら、バーバラ・

ローデン演ずるヒロイン、ワンダはそれと正反対のキャラ。良い妻にも良い母にもなれないワンダは、育児放棄で夫から離婚訴訟を起こされ、家から追い出された後も、あちらへフラフラ、こちらへフラフラ。映画館で眠っているうちに有り金を盗まれたあげく、夜の街をさまよっている中、あるバーで出会った中年男のデニス（マイケル・ヒギンズ）についていくことに・・・。

◆ワンダが何の主体性も持たないバカな女なら、一見紳士風に見えたデニスの正体も悪党。車を盗む程度なら小悪党だが、本作のハイライトは、ラストに向けての銀行強盗になるから、そりゃヤバイ！もっとも、デニスはワンダを無理やり犯罪に引き込んだわけではなく、「いつでも車から降りていいぞ」と言われるのだが、どこにも行くあてのないワンダは、仕方なくデニスについていくだけだ。ホテル内でのシーンを見ていると、2人は適当にセックスも楽しんでいたよう(?)だが、デニスは頭痛持ちで、あれこれ話しかけられるのは大嫌いらしい。

導入部が終わると、本作は、そんな、本来赤の他人同士のバカな女とバカな男の、車で弥次喜多道中になるが、それってホントに面白い・・・？

◆本作のハイライトは、後半からラストに見るデニスによる銀行強盗だが、1970年当時の面白いハリウッド映画とは異なり、本作のそれは、いかにも間が抜けている。もちろんデニスは、周到な準備をしたつもりだろうが、結果は惨めなもの。それに協力していた(?)ワンダは、銀行内に入っていなかったため逮捕されることはなかったが、何とも締まらない結末で、本作はジエンド。皆さん、なぜそんな本作を絶賛しているの？

2022（令和4）年8月8日記